「同化」ではなく「共生」を
―― 在日コリアン・アイヌ民族・沖縄の女たちから学ぶ ――

森　　真　弓

目　次

はじめに
1　日本人（わたし）の無知と偏見
2　在日コリアンと外国人登録法
3　日本社会の問題としての「在日」とジェンダー
4　在日コリアンの名前の意識的な選択
5　アイヌ民族女性の母親文化継承
6　アイヌ民族と天皇制
7　沖縄戦と平和教育
8　女性の人権と軍事基地
9　結論

はじめに

徳川幕府下の日本人の世界観をある古い地図が示している。1713年に寺島良安が『和漢山才図絵』を描いたとき，世界には３人種しかいなかった。内側に「日本人」，外側に「異国人物」と「外夷人物」である。異国人物とは中華思想の影響下にある11のアジア諸国であり，外夷人物は177もに分かれ，中華文字ではなく横文字を使う。そして寺島は日本に続いて朝鮮半島と琉球（沖縄）と蝦夷(北海道）の地図を描き，これら三つを他から切り離して重要な地域とみなした[(1)]。あれから300年が経とうとしているが，現在の日本人はこのような自己中心的な世界観から，どの程度脱却できているのだろうか。

神は人間すべてに「多様な」賜物と「同じ」尊厳を与えていると新約聖書のローマ12章は宣言し，多様だからこそ一つなのだという人間の現実と神秘について語る。なのに人間はお互いの違いを序列化しがちで，異なる人の尊厳を自分と同じと認めることが難しい。本論文は良安が挙げた三重要地域を現在の在日コリアン，アイヌ民族，沖縄の人々と置き換え，ジェンダーを意識した社会的文化的分析を使って同化政策の残忍さを暴き，多様性を認める共生のビジョンを探る。

1　日本人（わたし）の無知と偏見

わたしが家族と留学した1980年代のロンドンの学生家族寮で，韓国人の数家族と交わって大発見をしたことがあった。それはわたしが何と韓国・日本関係の歴史や現実について知らないかということだった。生まれて初めて聞く韓国人たちの訴える歴史的事実と彼らの異なる現代史理解に驚嘆し，わたしが受けてきた日本での歴史教育に大きな欠陥があったと感じた。

第二次世界大戦後，文部省は初めて民間の出版社に小中高の教科書を作る許可を与えたが，教科書検定制度は国策に添わない自由で新しい歴史解釈を拒絶してきた[(2)]。本学でも2001年秋，自治会の学生たちが中国と韓国からの留学生たちを招き，教科書問題を話し合ったのは画期的だったが，日本政府の政策や社会の古い体質が戦前からあまり変わっていないことを浮き彫りにしてしまった。つまり，中国や韓国の社会が永年日本の教科書が暴露する近代歴史理解の偏りに怒りと苦しみを覚えて訴えているのに，耳を傾けようとせず隣人の痛みを感じない，日本社会の閉鎖的な意

識の問題があらわになったのである。

歴史的に日本政府が異なる人々に対して取ってきた政策は「同化」(同和) であった。同化政策では同じであることが理想化され，異なることはタブーと見られる。したがって少数者は多数者の中に溶け込むしかなく，抵抗したらいじめられ生き残れない。同化政策の中で教育される大多数者は、日本においても複数の言語と文化が存在することを忘れ[3]，多数者の意識を背景に日本は単一民族の国という倒錯神話を正当化し，それを日本のユニークさだと勘違いする。しかしこのようなプライドが日本に住む多様な人々への偏見や差別を作り維持し，社会の閉鎖性を温存してきた。

2　在日コリアンと外国人登録法

わたしが大学入学以来29年住んだ近畿地方で「在日」と言えば在日韓国・朝鮮人のことだった。南北分断前から在日であった人にとっては韓国・朝鮮という使い分けには苦悩があるに違いない。最近の在日が自らを「在日コリアン」と呼び出して，わたしは英語の「コリア」が南北を超える名称であることに納得した。アメリカでは民族のアイデンティティを保ったままアメリカ人であることができるので，コリアン・アメリカンが存在する。つまりわたしも移住すればジャパニーズ・アメリカン（日系アメリカ人）になれるのだ。しかし日本にアメリカ人が移住してもアメリカン・ジャパニーズにはなれない。日本名にしないと帰化できないからである。1972年に日本と中国の国交が正常化したとき，それまで国交があった台湾と絶交になり，在日台湾人は日本名に変えて帰化するか台湾に帰るかの選択しかなかった。台湾生れの女優ジュディ・オングは日本に帰化せざるを得なかったとき，自分が台湾人であるという強烈なアイデンティティに目覚めたという。それは社会が認めない悲しい個人の自覚である。同化政策とは人間の尊厳を無視した差別的で酷な政策である。せめて「在日コリアン」の呼称を使って，韓国系日本人(コリアン・ジャパニーズ)が当たり前に認められる将来の日本を思い描きたい。

今日本に住んでいる80万人の在日コリアンの９割が２，３世代目の日本生まれである[4]。今年（2002年）初めて永住外国人が滋賀県米原町で住民投票できたことは画期的であったが，半数以上が棄権した。ある在日コリアンは不在者投票を選んだ。住民投票に関する嫌がらせの脅迫電話やメールが40数件あったという[5]。在日コリアンは納税義務を果たしているのに，日本人なら当然の他の諸権利が在日コリアンには法律的に保証されていないばかりか，日常的な偏見にさらされている現状がある。

そもそも在日コリアンはどのようにして日本に来たのか。コリアは日本の最も近い隣人で，日本が中国文明を輸入したときその掛け橋となってきた。この三つの文化は「確かに独自に練られ発展し，それぞれがユニークなものになった[6]」と Changsoo Lee George De Vos は言う。日本は中国とコリアの文化を受け容れ練り直して独自の文化をこしらえてきた。近隣の三つの文化圏の近さがここでも浮き彫りにされる。

最初にコリアを侵略しようとしたのは16世紀末の独裁者豊臣秀吉であった。その後キリシタン弾圧のために鎖国化したものの，近代日本は西洋化・軍国主義化して行く。世界の舞台に日本を押し上げた日清（1894〜95）と日露（1904〜05）の戦争は朝鮮半島を戦場にしたものであり，その植民地化が目的であった。1905年に伊藤博文による乙巳(うるさ)保護条約(日本では第二次日韓協約という）が韓国を孤立させ，1910年の日韓併合の敷石となった[7]。第二次世界大戦の終結（1945年）まで日本の植民地であったコリアに日本人が約70万人移住して政治と産業を支配した。その際コリアの人々から土地を奪い日本の移住者に与えたので，元土地所有者たちが日本へ職探しに来

ざるを得なかった[8]。過酷な植民地政策による農村での経済的困窮は1930年代から1945年までに72万人のコリアンたちを日本へ送りこんだ。しかし得た職は悲惨な労働条件の炭坑や軍事工場であった。この構造は今も変わらず，日本の経済侵略が他の地域の労働者を日本へ送り込み，条件の悪い職場で働かせている。

川本良明氏は在日コリアンが全部強制連行の末裔ではないことを注意深く検証する。強制連行は，天皇制ファシズム政府が国際連盟を脱退し対中国への全面戦争に突入して自滅の道を歩む中で，国家総動員体制を敷いて対米開戦に至った1941年からのことであった[9]。つまり強制連行は日本のファシズムが強行した恐るべき一連の犯罪の中に位置付けられなければならないわけだ。そして軍事政府は戦時中36万5千人のコリアン男性を徴兵し，組織的に１万人のコリアン女性を「従軍慰安婦」として戦場に送り込んだ[10]。

50年近く経った1971年，長い沈黙を破ってキム・ハクスン（1924～1997）が韓国から日本を訪れ日本政府を訴えたことは，日本人と国際社会に大きなインパクトを与えた。彼女が公にした戦時中の経験は，韓国を始めインドネシア，オランダ，沖縄，中国などの女たちが第二次大戦中に性を提供する奴隷とされていた事実を明らかにした。わたしもある関西の市民グループで，台湾から元慰安婦だった人を招いて話を聞く機会があった。その人が会場で苦しみもだえながら証言した内様は想像を絶するものだった。聴衆は皆ショックのあまり言葉を失った。わたしは彼女の介抱を手伝い，その心の動きを間近に見ることができた。宝塚ではついたての後ろから話すことを固守したこの女性が，次の会場の名古屋では皆の前で話したいと言ったときの感動をわたしは忘れることができない。椅子から転げ落ちるほどになって過去を語る苦しみと痛みを味わったのに，彼女は沈黙を破ったことの方を喜び，日本人聴衆であるわたしたちに感謝してやまなかったのである。

日本が敗戦，コリアでは解放となった1945年，200万人の在日コリアンが帰国したが，55万人は日本に残らざるを得なかった[11]。1947年には現在に至るまでのコリアンたちに対する偏見と差別の温床である「外国人登録法」(外登法）が前天皇の名において施行された。それは憲法が発布される前日，天皇が元首ではなく象徴に過ぎなくなる一日前だったのである。1952年までアメリカ合衆国の駐留軍によって監視されていた新政府は外登法の下に在日外国人を一括支配し，日本国籍を残したままでコリアンたちを「外国人」として登録した。またコリアンたちの学校や他の組織体を閉鎖させ，その財産を没収した。同年初めて20歳以上なら女にも参政権を与えたが，在日コリアンや中国人たちをこの権利から完全に除外した[12]。

1951年にサンフランシスコ講和条約を調印して第二次世界大戦が終わったが，在日コリアンの問題は解決しなかった。この講和条約はコリアンたちの日本国籍を奪って無国籍にしてしまった[13]。国家のはざまで少数者の人権が抹殺された。それでもこの悪名高い外登法の指紋押捺制度が導入されるまでに数年かかっている。大戦中の満州国（中国）でも日本政府の圧力に人々が抵抗したように，在日コリアンたちが指紋押捺を拒否したからである。もっと後の指紋押捺拒否は1980年代に起こったもので，日本人支援者を巻き込んで外登法に反対する市民運動になった。1985年には２万人を超えるコリアンたちが５年ごとに書き換えなければならない登録証の指紋押捺拒否をしている。1988年からは一度きりの指紋押捺に変わったが，コンピュータ化して政府がすべての指紋のネガを持てるようになって，偏見と差別の温床は巧妙に残された[14]。

ヒロヒト天皇が亡くなった1989年，指紋押捺拒否を裁判で闘っていたケースが告訴人に恩赦を与えるという形で一方的に取り下げら

れた。このようにして一連の軍国主義政府の責任を問う市民運動を骨抜きにする勢力が反撃に出たのである。在日コリアンたちは現在の制度を改悪とみなしている。永住権を持てば押捺は免除だということに対してもである。在日コリアンたちは（戸籍のように）同居の家族も登録させられ，自分の署名と写真の入ったカードの携帯を義務づけられているし，不携帯の場合は20万円以下の罰金か１年以下の懲役が課されている。[15]

３．日本社会の問題としての「在日」とジェンダー

柳美里という在日コリアンの新進作家がこう言う。「在日韓国人は本名で生きていくひと，国籍を保持しながら日本名で通すひと，帰化して日本国籍を取得するひと（当然日本名）の三つに分けられるが，このいずれもアイデンティティの問題をかかえこまないわけにはいかない。[16]」つまり，本名を名乗れば日本社会の偏見と差別に直面する。通名にしても帰化して日本国籍を取得しても，二つの民族性に引き裂かれる。日本社会がコリアンのアイデンティティを差別するからである。自らもさまざまな差別待遇を経験した在日の精神科医の金長壽（キムジャンス）氏はこれを「在日症候群」と名づけた。歴史的に作られた存在である在日コリアンは圧倒的少数者として支配的多数者の集団・同質志向性に翻弄されるので，人格形成期にPTSD（外傷後ストレス障害）を経験して自己否定から来るさまざまな精神的疾患に悩まされる。これが在日コリアンの問題だとする「レッテル貼り」を警戒しながら，金氏は「在日症候群」を「日本社会を映す鏡」であると指摘する。[17]

わたしもこの視点が大事だと思う。差別されているかわいそうな在日コリアンたちの問題と見ることでは解決しない。これは日本社会の問題なのである。いじめや虐待やセクシュアル・ハラスメントと同じ構造を持っていて，わたしたちも当事者（加害者や被害者）であることに気づく必要がある。同化政策が在日外国人を抑圧しているのなら，「きわめて巧妙に，日本人に対しても同じ政策をとりつづけていることに気づくべき[18]」なのである。

わたしは「キリスト教の歴史」を担当しているが，たとえばキリシタン迫害はかわいそうな人たちの悲惨な話だという理解で終わらないのだと学生たちに言う。少数者キリシタンに問題があったという多数者の暴力的な解釈がしのび込んでくるからである。わたしが教室で強調するのは，これは日本の社会が異質な思想を弾圧した歴史なのであって，当時苦しんだのはキリシタンだけでなく，幕府に反対する思想がすべて弾圧され抹殺されたことである。少数者の問題は多数者が引き起こしたものであるという認識がこの場合も必要となってくるし，自分たちも巧妙に自由を奪われ人権を疎外されているという，あるいは自分も無意識に加害者の立場に乗っているという視点，自分も取り込まれている問題として取り組む視点が必要なのである。

それにしても在日コリアンの女たちの声を集めるのは難しかった。特にわたしは今札幌に住んでおり，大阪のコリアン・ワールド[19]から遠い。最近の『在日コリアンのアイデンティティと日本社会――多民族共生への提言』（上記ですでに引用）も執筆者は男ばかりでがっかりした。これはジェンダーの問題である。男女の数のアンバランスに気づこうとしない，在日・日本を問わず出てくる男の世界の問題だ。なぜ女に書くチャンスを与えるという発想がなかったのだろうか。優れた女がいないとか，女が発言しないからだという反論には根拠がない。それはそのまま日本社会で在日コリアンのアイデンティティを闘い取っている男たちが，日本社会からそう扱われて疎外されてきた点ではなかろうか。在日コリアンのアイデンティティの闘いは主に男の視点でのみ発表されてきたのは事実である。

数少ない在日女性の声，鄭暎惠(チョンヨンヘ)氏はこう言う。「例えば，創氏改名，日本名の強要という植民地主義の発想には多くの『在日』が反対している。私も反対だ。が，その一方で，家の存在を重視するあまり，個人を軽視し女性を差別する朝鮮・族譜の発想にも私は反対したい。[20]」鄭氏は在日・日本を問わず，女と子どもを私的な家庭という領域に閉じ込める思想を問題とする。いったい男の在日コリアンが同化政策に反対できるだけのものを持っているのかと。性差別を無意識にやっておいて「解放」もないだろうというのである。「どんなに辛くとも，息子さえ産んでおけば，そしてその息子が成長していつか家長となる日がくれば，いつか全てが相殺されるはずと，女は耐えるしかなかった[21]」という現実の女の声は，まさに女を産んでも価値はないという自己否定であって，金医師が指摘した在日コリアン症候群であろう。韓国の土着宗教のシャーマンによって行われる「死後結婚」という儀礼が都市部でも残っていると言うが，女は結婚しなければ成仏できないという思想に由来する。未婚の女の葬儀を行う前にその儀礼を行い，彼女の祭儀はそれ以後男の家でやることになる。死んでまで女は男の家に入って従属させられるのである[22]。このような女を否定する環境の原因は在日の，そして日本の(また世界の)男優位の考え方である。

このような男女の序列は，韓国から日本に移住してイエ制度の緩やかなつながりの良さを知ったという呉善花(オソンファ)氏の主張にも表れている。彼女は『スカートの風』（上下２冊[23]）の中で，韓国の血縁主義で傷ついた心が血縁以外の使用人なども含む日本のイエ制度によって癒されたと繰り返し語る。彼女が経験したことはつまるところ，自国だと家族が結婚を押し付けるストレスがあるが，外国にいるとそれがないという女の共通した経験なのではなかろうか。異文化体験をした多くの人が自分の文化圏以外で気楽さを感じるとはよく聞くことだ。女がそれを感じる場合，文化の違いよりもジェンダーの問題である。そういう意味でジェンダーの視点は人種や民族の差別を超えるスケールを持っている。

４．在日コリアンの名前の意識的な選択

日本人の女であるわたしは在日コリアンの女たちが経験してきた痛みをほんとうには理解できないだろう。だが名前についてのわたしの選択が，彼女たちの名前に関する勇気の経験と触れることができればと思う。わたしはサンフランシスコへ勉強に行った1995年をきっかけに，もと夫とわたしの合成苗字（アメリカでは可能）を使い始めた。おりしも日本の国会で夫婦別姓法案が通るかどうかというときだった。わたしは自分の姓をどうしようかと考えながら日本に帰ってきて８ヶ月間合成名を使ったので，新聞社が取材に来たほどである。結局夫婦別姓法案は当時の自民党議員らの猛反対で通らなかった。わずらわしさに耐えかねたのと，自分の姓を合成姓の中で半分でも使うことに慣れてきて，わたしは夫の姓を切り取り結婚前の姓に戻って，通名として使うようになった。友人たちにその旨を伝えたくらいの個人的なことで，戸籍上は夫(現在は離婚)の姓のままであった。女の姓は結局父のものだから結婚して夫の姓にするかどうかにこだわるのはむなしいとある人は言った。が，父母の姓が偶然同じだったこともあって，わたしはそうは思わなかった。自分の元の姓を自分なりの世界で取り戻しただけでわたしはかなり元気が出たからである。姓に関してすっきりした答えはないが，以後もう２度と自分の姓を変えるつもりはない。

現在女たちが戸籍制度による結婚で自分の姓を失うことの痛みを重要視し始めている。姓を変えない女は事実婚（子供が生まれたらペーパー結婚と離婚をくり返して夫の姓を継がせる女，子供が生まれても事実婚のままの女――したがって子は母の姓を名乗る)を選ぶ。

また結婚のとき戸籍上は夫の姓に変えるが職場で通名を通すことが比較的スムーズにできるようになった。しかしどの場合も在日コリアンの本名と通名の選択や使い分けのように，自分のアイデンティティの不確かさにいやな思いをする。戸籍が作った男優位の社会では，自分のアイデンティティを大事にする女は家族を破壊するとか男に敵意を持つといって非難される。だが日本の女たちは自分の名前を意識的に選択することで，在日コリアンたちの本名宣言の運動と連帯できるのではなかろうか。少ない資料[24]の中から，在日コリアンの女たちの名前に関する選択を紹介する。

⑴　呉美香（オミカ）[25]は帰化２世である。彼女が生まれる前に父は帰化したので宝田という苗字を得ていた。高校を卒業するまで彼女は宝田美香で通したが，自分が韓国人だというアイデンティティで揺らいだことはない。帰化したことでかえって家庭では韓国の伝統を意識的に重んじていたからである。ただ差別されないために自分が韓国人であることは隠す必要があった。卒業後，青丘社という民族名を取り戻す会でコリアの歴史を学んで自信をつけ，父の韓国姓を名乗るようになった。父はこのような娘の変化を心配するが，母が彼女を応援している。

⑵　尹照子（ユンチョジャ）[26]の父は韓国人で母は日本人だったが，照子が８歳の時に離婚した。その時まで父が韓国人であることを知らなかった。父は外登法で外国人と登録されていたから照子の姓は始めから母方についていた。父の国籍を隠すように母に教えられたが，母が再婚したとき自分が取り残された気がした。照子が高校生になったとき，自分の韓国姓を隠して生きていた父に会ったが，まもなく47歳という若さで父が急死した。葬儀の席で照子は父のことを思って泣いた。そして２度と韓国人である事実からは逃げまいと誓い，亡き父の民族名を名乗るようになった。1989年には家庭裁判所の氏の変更申し立てが成立し，民族名を本名とする日本籍朝鮮人になった。彼女は言う。「わたしがずっと思ってたことは，もし差別がなかったら，父は婚姻届けを出し，私は父の名前で『ユンチョジャ』になってたはずだ。差別があったから，私に日本の戸籍を与えるために，私生児にしたんだ，って。そうやって奪われた尹照子という名前を，日本の社会に認めさせたい，これを日本の戸籍に載せてやるんだ，と」。

⑶　姜潤子（カンスンジャ）[27]は10歳で朝鮮学校に転校してほっとする。それまで学校は嫌いだった。それでも最初朝鮮学校で韓国名だけを名乗るのは不思議な気がした。今彼女は小さいころに民族教育を受けたことを誇りに思っている。当時女子はチョゴリかセーラー服かどちらを着てもよかったのだが，1960年代在日の意識の高まりの中で彼女のクラスの全員がチョゴリをあつらえ，それが全校的に広まった。電車の中などでチョゴリを着ていると目をそらされたり，敵意をあらわにされたりしたというのに。順子は朝鮮高級学校卒業後，日本企業で働けることを願って簿記学校に通った。「外国人お断り」という企業ばかりの中，本名で応募したので案の定就職できなかった。今は青年学級やカルチャーセンターで韓国語を教えることに情熱を傾ける。彼女の願いは日本政府が朝鮮学校を日本人の学校と同等に扱うことである。朝鮮学校は各種学校と同じ扱いで高等教育への道が阻まれている[28]。

⑷　金正美（キムジョンミ）[29]は中学までは通名で日本の学校に通ったが，高校は韓国学園に進んだ。だが韓国語よりも英語の勉強に打ち込む。卒業後，両親の家業の焼肉店を手伝うことと日本脱出との間を揺れ動きながら，正美の結婚を望む両親から精神的に独立し，コスモポリタンとしての自分に目覚めて行く。一人で横浜のア

メリカ人家庭に移りナニー（家庭教師兼子守）をしたり，カナダの外資系の会社で秘書もした。欧米人と接するのが「すごく気持ちよかったのは，私を個人として見る」からだと言う。23歳のときニュージーランドの銀行で働きながら「日本にいると窒息しそうで，外に出ると，私はこんなにイキイキするのか」と感じたと言う。26歳でオーペア（書生兼お手伝い）になってイギリスで勉強した。日本に帰り本名を名乗り出たのは青丘社の英文機関紙編集者であったときである。通名を使っていたときと本名を名乗りだしてからの自分は違うと金正美は言う。「通名のときは，やっぱり，ウソついて生きてるっていう後ろめたさみたいなのがありますよね。自分が自分として生きてない。本名になってみて，よくわかりました。」

正美はそれまで求めてきた韓国式家父長制からの解放を系統立てて理解したいと思い，34歳でアメリカに留学し社会学の学位を取った。在日朝鮮人の問題を相対化できたのは，アメリカでの民族差別や性差別の共通性と違いを肌で知ったことによる。「人間というのは最終的には自分のためにしか動けない」ということがわかった。そして正美は在日であるというアイデンティティを，それが差別の対象になっているからこそ宝にしたい。関心事は自分「自身」を育てることで，それが在日であれ日本人であれアメリカ人であれ，正美は規制の閉鎖的なグループには興味がない。同時に自分が在日コリアンであるという意識が高まり，韓国を訪問するようになった。正美が最もいっしょに何かしたいと思うのは在日の女性でもあるとも言う。

これらの４人の女たちには共通した強さがある。それは在日コリアンとしての強いイデンティティである。しかも一つではなく多様性のある表現方法である。呉美香は韓国と日本の名前をつないで帰化した韓国人としての誇りを持って生きる。尹照子はコリアンと日本の混血を大事にし，戸籍が在日の本名を受け容れるべきだと主張する。姜潤子は「在日コリアンは税金を払っているのだから朝鮮学校を日本の学校と同等にするべきだ」と考える。金正美は在日コリアンでありながらコスモポリタンとして生きていく。なんと多様性に満ちた選択モデルであろうか。

大阪の生野区は４分の１の住民が在日コリアンで占められている。徐貞順（ソジョンスン）氏はある在日韓国キリスト教会の牧師である。彼女は自分の使命を「在日のコミュニティと日本社会で，女が男と対等だという考え方のパイオニア，ロールモデルとして生きることだ」[30]と言う。彼女が執筆者の一人である中学生向きの本[31]には旧約聖書のエステル王妃の話がある。エステルはペルシャに移動させられたユダヤ人だったが，それを隠してクセルクセス王妃になった。彼女はハダサ（砂漠に咲く強くて美しい花）という本名を持っていたのだ。勇敢なこの白い花のように，ハダサは民族皆殺しの計略からユダヤ民族を救った。それがプリムの祭りとして今も祝われている[32]。これは在日コリアンの女たちの祝いとも言えよう。

５　アイヌ民族女性の母親文化継承

非抑圧者は幼少時から差別と偏見に傷つけられた結果，しばしば自分を肯定的に見られない。アイヌ民族の両親をもつ杉村京子も自分の尊厳を取り戻すのに長い期間を要した。彼女の人生物語によって同化政策がいかに人間の成長を阻むか，それを跳ね返して人間性を取り戻すのに何が必要なのかを見てみよう。

京子はアイヌ民族出身だということを恥じて隠した。1930年代，彼女は兄が出征（後に戦死）するのを誇りとする日本の着物を着た軍国少女であった[33]。祖父トンビンはアイヌ民族の命綱である漁業と狩猟の権利を日本政府によって奪われた。1899年北海道旧土人保護法[34]という差別的な法律によってアイヌ民族に

あてがわれた土地は条件の悪い耕作地であった。トンビンが正当な土地配分にあずかれなかったのは日本語で登記ができなかったからで，その土地は他人の手に渡り，痩せた代替地があてがわれたのである。これは19世紀以来アイヌ民族が飲まされて来た煮え湯であった。その後30年で南から北海道に移住した小作人が農業を優遇され，後にその土地は日本人に政府から付与されている。アイヌ民族がこの保護法に反対する声を上げたとき，政府は土地の収益を学校や道路に使うという名目で拒絶した。第二次世界大戦後の農地改革もアイヌ民族の土地所有権を無視したままであった。[35]

貧しさから京子の健康状態はすぐれず学校は休みがちだったが，彼女は持ち前の明るさと巧みな歌と裁縫で乗り切り，いじめられたという感覚はなかったという。16歳のときアイヌ家族に育てられた日本人と結婚してから本当の苦労が始まる。家庭は夫の暴力と人種差別的な罵声の場であったが，二人の娘たちと息子を思って耐えるしかなかった。しかし一人息子が事故で亡くなり，京子は夫の育てのアイヌ親たちからさえ見捨てられた。娘たちを置いて33歳で家を出たが，生活はさらに苦しかった。だが観光産業が隆盛となった1960年代，アイヌ民族の木彫り熊を作りながら生き残って来た。[36]

京子の十代の娘たちも父から逃げ出し，母の元で暮らすようになった。娘の法子を保護した警察は子供と夫を置いて逃げた京子を叱った。夫の様子を見に帰ると内妻（？）が去った後だった。京子は娘たちの父を哀れと思い経済的な援助をするようになったが，彼女自身が酔うと弱った彼につらく当たってしまうのはどうしようもなかった。病院で夫を看取ったとき、最期の夫は目に涙を浮かべていたという。このような壊れた家族をつなぎとめようとする彼女のパワーはどこから来たのだろうか。暴力，病気，貧困のどれも彼女の生きる力を妨害できなかった。しかしアイヌ民族であるアイデンティティを犠牲にし，日本人として生きるしかなかった苦しい体験は，どう整理され癒されただろうか。それはアイヌ民族の母の世界に戻る目覚めを通してであったという。[37]

京子の母のキナラブック[38]は働き者でアイヌ語を完璧に話せる人だった。彼女は歌，踊り，そしてアイヌの様々な祭儀のやり方を知っていた。キナラブックには９人の子があったが最初の３人は早くに亡くした。夫は石狩川で材木を運ぶ危険な仕事しかない中で事故死した。キナラブックは突然の夫の死を受け留める間もなく，９歳の京子と５歳のフサが大人になるまでは何としても生きる決心だった。後にキナラブックが述懐して言うには，朝早くから夜遅くまで働き続け，子供たちにアイヌ民族の物語を語って聞かせる暇もなかったと。1965年，76歳で目を手術した母を引き取った京子は，母の夢がやっと適ったのを知った。同居してみて，京子は母がどんなにアイヌ民族の伝統を娘に伝えたかったがわかった。翌年にはキナラブックは旭川市から朝日文化賞を受けている。この嬉しい出来事が京子をさらに母からのアイヌ文化継承に情熱を傾けさせることになった。[39]

再度京子は母になぜ子供たちにアイヌ文化を教えなかったのかと問う。キナラブックは答える。選択の余地はなかったと。彼女の母も子どもへのいじめを避けるために家でも日本語を使わせた。日本語は当時，彼女にとって人間として生きることができる唯一の手段だった。妹は学校に行ける年齢であったが，キナラブックは大きすぎて就学できなかった昔を思い出す。彼女の勉学へのあこがれが否定されたわけだが，アイヌ語の保存のためにはよかったのだ。キナラブックはそれでも外の世界への興味を押さえきれず，独学で日本語を学ぶ。そんな話を母から聞いて，京子は小さい時からアイヌ語を話していたら自分の

人生はどう違っていただろうかと思いめぐらすのだった。みやげ物店を営むかたわら外国語同然のアイヌ語を習うのは，40歳を超えた京子にとって並大抵のことではなかった。キナラブックは熱心に自分からアイヌ語を習う娘がいとおしく誇らしかった。83歳で母が死ぬまで実の母を教師として，京子はアイヌ刺繍から民話，歌，踊りを通して幅広くアイヌ民族について学んだのだった。彼女が習ったことは単に技術的なことに留まらない。アイヌ民族の広い世界観と知恵であった。[40]

アイヌ民族は自然との深い関係の中に意識的に生きる知恵をもっている。人間と動物とを区別せず同じ自然に属するものと見る。違いは人間が言葉を使って気持ちを伝え合うことである。だから人間の使命は世界を知り神々に毎日祈ることである。アイヌ民族は必要な量以上に狩も採集もせず，自然を敬い平和に共存する。[41]

京子はいろいろな場所で自分の経験を語ること，アイヌ民族の木彫りや刺繍を教えるのを喜びとする。京子は言う。「素晴らしい物がだんだんと古くなって，手で触るとちぎれてしまいそうな状態ですね。だから新しい物を造って残しておきたい。そうすると，五十年，百年経っても私の作った物は残っているはずです。そのころ研究したいという人が現われたら，調べてくれればいいと思って。それが私の生きがいです。」[42]

6　アイヌ民族と天皇制

幕藩制国家の末期1854年の日本はロシアとの通商[43]を有利に進めるため，アイヌ民族を「蝦夷」という外国人扱から日本人扱いに転換した。つまりアイヌ民族を利用して日本の領土と通商利益の拡大を正当化したのである。[44]それはアイヌ民族を北方へと追いやってきた６世紀からの日本統一を正統とする歴史の帰結であろう。日本の先住民族に対するこのような国家レベルの暴行を Francis と Nakajima は次のように言う。

「16世紀後半に台頭した日本国家の辺境植民地は，商人勢力との連携によりアイヌ民族を組織的に搾取した。男たちを家族から引き裂いて危険な仕事に従事させ，年配者や子供たちを餓死させ，女たちを性暴力（レイプ）の環境の中に封じ込めた。この非人間的な扱いは，日本社会がもたらしたアルコール依存症をはじめとする病根と相成って，アイヌ民族の人口を抹殺した。このような侵略に対して1457年，1669年，1789年に起こったアイヌの武力反撃は，日本にアイヌ民族の完全な鎮圧の口実を与えてきた。」[45]これを読むと第二次世界大戦時の日本を思わせる。経済を優先し外国人を差別し日本人を序列化する，現在の日本社会の構造とも基本的に同じである。旧土人保護法に代わる新しい「アイヌ文化振興法」（1997年）も実は，先住民族としてアイヌ民族の存在を認めたのでも過去の歴史を反省・謝罪したものでもない。

最後の将軍徳川慶喜が明治天皇に権限を譲ってから，明治維新政府はアイヌ民族の最大の居住地であった島を北海道と命名した。アイヌ民族の地名のすべてに漢字があてがい，1872年に公布した「戸籍」でアイヌ民族を皆同化し，選択の余地も例外もなく日本名で登録したのである。[46]つまり「創氏改名」という政策である。

戸籍を裏付けとした同化政策の中心にある「創氏改名」とは何だろうか。1939年に植民地コリアで「氏設定に関する政令」によって創氏改名が強制されたが，佐藤文明氏によると「これは日本式の氏名を名乗るものではなく，届け出がない場合は『戸主の姓をもって氏とす』というもの。このときから“夫婦別姓”だった朝鮮の戸籍が“夫婦同氏”になっている…また，戸主との続柄に日本式の序列呼称『長男，次男…，長女，次女…』，“私生児”に対する差別呼称『男，女』が持ち込まれた。」[47]まさにコリアの家族・族譜の宗教

文化を破壊するものであったことがわかる。ちなみに沖縄では古来の日本と同じように無姓だったが，17世紀に士族間で家柄を尊重するようになって農民も屋号や地名などを姓として名乗りだした。1886年の戸籍制度が沖縄の命名習俗を一掃し，日本式やり方が強制された[48]。創氏改名に共通しているのは，「天皇のあわれみによって朝鮮も台湾も沖縄も（アイヌ民族も）みな天皇の子にさせていただける」という天皇制イデオロギーである[49]。

日本人も明治政府が樹立されるまで苗字帯刀を許された士族以外の大多数は，苗（名）字はあったが公称を禁じられていた。寺社は徳川幕府のキリシタン禁令執行代理人として思想弾圧に努めるかたわら，氏や苗字が平民に使われないように気を配った。高橋菊枝氏らは，別々の歴史がある様々な名付けの習慣が次第にイエ制度に統合され，一つのイエに一つの姓という家族イデオロギーを形成したと言う[50]。「氏素性」という言葉が残っているようにイエを由緒ある氏に結びつけるという権威づけが行われ，朝廷との関係で新しい氏を名乗ることで叙任，昇進が行われた。ついに鎖国明けの新時代，日本人全員に天皇から氏が与えられたというのが，近代天皇制における創氏改名の日本人版であろう。

「言霊思想」がなぜこんなに創氏改名にこだわるのかの説明になると宮田節子氏は言う[51]。これは言葉と霊とが一つであるという考え方である。外国人を日本人に同化することに熱心だった理由はこの思想のせいで，例えば韓国人は日本人ではないが，もし日本名で呼ばれれば日本人の霊と一致する。名前と霊は一つなので，国のために戦わなければならないとき，日本人という霊の一致が必要だった。しかし一致を認めず，序列化し差別するのがこの思想の矛盾するところである。1896年にはアイヌ民族の男たちが徴兵されたが，扱いは帝国の臣民日本兵とは全く違い，蔑視・冷遇された。アイヌ民族は創氏改名しても出身が戸籍から消されなかったからである。

わたしは10年ほど前大阪でチカップ美恵子氏の講演を聞いた。アイヌ文様の刺繍家であり著作家であり，多文化共生社会の国際的な旗手でもある彼女は，美しいアイヌ文様のヘアバンドとパンツ・スーツを着ていて，柔らかいがはっきりとした特徴ある声で語った。講演は前の中曽根康弘首相が1986年にした失言についてから始まった。日本には差別されている少数者などはいないという，歴史的な無知をさらけ出す中曽根氏の発言が国際的に問題になっていた。アイヌ民族はこれに反対して行動を起こし，「アイヌ民族が存在することを自ら宣言する東京集会」で声明文を発表した。これが日本社会で初めて少数先住民族の人権を意識する芽生えとなった。あれから16年たった。当時のチカップ美恵子著の『風のめぐみ[52]』と最近の『アイヌ・モシリの風[53]』を比べてみると，彼女の刺繍文様の腕が大きく上がっているのが見てとれる。それは霊のレベルでの美しさを映し出している。

新約聖書のコリント信徒への第一の手紙には霊的な賜物の話がある[54]。霊的な賜物とは人間の心から出てくるその人らしさである。わたしたちにはみんなそれぞれ違った霊的な賜物が与えられている。それぞれの部分は違った機能をもつが，不必要なものは一つもなくすべてが重要である。一つが苦しめば他も共に苦しむ。もし一つが尊重されれば他はそれを自分のことのように喜ぶのである。アイヌ民族の知恵が語るように，また旧約聖書の創造物語が語るように[55]，自然の恵みの中でわたしたちはみな神からのすばらしい賜物を分かち合うように造られている。

7　沖縄戦と平和教育

わたしがサンフランシスコ神学院で夏学期を過ごした1995年は第二次世界大戦が終わって50周年ということで，さまざまな記念行事のニュースが全世界を駆け巡っていた。日本

でも広島と長崎の８月はよく記念されたと思うが，50年前の４月１日と６月23日に沖縄で何が起こったかを知る人は少なかったのではなかろうか。これらの日付は第二次大戦中の沖縄戦の開始と終了の記念日である。わたしは1991年と95年に沖縄を訪れたが，他の地域とは違う歴史，違う意識があることを学んで目を見張る思いがした。

沖縄の歴史を概観すると，やはり在日コリアンやアイヌ民族が受けたのと同じ同化の傷跡が見えてくる。沖縄はもと琉球王国で，７，８世紀以来中国や日本や東南アジアに開かれた貿易で文化の花を咲かせてきた。成立したての徳川幕府が1609年薩摩藩の侵略を承認して琉球藩を立てると，琉球は19世紀に至るまで他の地域から隔離され，鎖国状態の日本の貿易通過点にさせられた。1854年アメリカ合衆国のペリー提督が日本に開国を迫ったが，やはり琉球を通過基地とした[56]。彼は１年前に那覇を訪れて計画を練っていたのである。清国との外交関係で優勢を狙った開国新日本が1879年に廃藩置県をしいて琉球藩から沖縄県と改名した。明治政府は沖縄の男たちを徴兵した1898年（アイヌ民族徴兵の２年後）から20年間をかけて，在日コリアンやアイヌ民族と同様，沖縄を同化政策で東京（天皇）を頂点とする政治的・経済的な仕組みに取り込み序列化した[57]。

戦後沖縄を支配してきたアメリカ合衆国から1972年に「沖縄返還」が果たされたとき，沖縄はアメリカからも日本からも独立すべきだという声が上がった。現在もアメリカ軍の基地の大半に沖縄の土地が使われていることから，沖縄は結局両国の植民地だという不満が渦巻いている。このような人々の意識は沖縄戦の経験を概観するとよく理解できる。

沖縄戦での経験を人々に語ってもらうのは並大抵のことではなかったと『(改訂版) 沖縄戦――民衆の眼でとらえる戦争』の著者大城将保氏は言う。話してくれた人の大半が彼に言ったことは，その晩は眠れなかったということだった。妻に戦争の経験を初めて語ったために精神科で治療を受けた人もいた[58]。大城氏によると，沖縄戦の経験者はアメリカ軍を恐れるよりも日本軍に怯えていたという[59]。日本軍がまず家を略奪したので，人々は食物や水を持ち出す暇もなくガマへ逃げた。ガマとは沖縄によくある自然の洞穴である。アメリカ軍が攻撃してきたとき，日本軍がガマへ逃げてきて，隠れていた非武装の人たちが危険な屋外に押し出された。狭いガマの中では病人は毒殺され，人々は自殺するように追い込まれた[60]。子供はうるさくて敵に見つかると言っては殺され，人々自身が他人に殺されることを恐れて自分の子供を殺した[61]。逃げようとする者は日本軍に銃殺された[62]。フィリピンやハワイに移住していて沖縄に帰ってきた人たちが多かったが，それらの人々にはスパイ容疑がかけられた。事実沖縄の多くの人はスパイ容疑で捕らえられた[63]。天皇のために死ぬ覚悟の日本兵たちは女子供老人を巻き込んで「玉砕する」よう精神的に追い詰められていて，誰も信じられない状態だったのだろう[64]。こうして多くの沖縄県民たちが日本兵に殺され，日本兵と共に自殺・他殺の地獄を経験したのである。

1995年の２月に沖縄で行われた北アメリカの宣教師派遣団体 JNAC[65] の平和会議に参加したとき，わたしは仲夏樹氏と１週間同じディスカッション・グループにいて彼の母の経験を聞いた。幼かった彼の母はシブク・ガマに避難していたが，たまたまそのガマのリーダーが二人のハワイ移民帰りだったそうた。ハワイの生活を経験していた二人は日本軍が教えたこと――アメリカ軍は無差別に県民を攻撃する――を信じなかった。だから千人の県民が全員アメリカ軍の捕虜となって助かったという。一方チビリ・ガマという近くの洞窟では，すべての避難者がアメリカ軍が来る前に自害したそうだ。もし仲氏の母がチビリ・ガ

マにいたら彼は今ここにいないのだと考えると，見学に行ったチビリ・ガマの暗闇が何とも痛ましかった。

沖縄戦では日本軍は10万人（その３分の１は沖縄県民）しかおらず，急造の15の軍事飛行場に本土からの援軍はなかったという[66]。それに対してアメリカ軍の方は兵士55万人と軍艦1500堰があった。100日にわたる沖縄戦で130キロ間に出た死者は沖縄県民が20万人，日本兵が６万５千人，アメリカ兵が１万３千人だった。マラリアと飢餓の犠牲者３万人を合わせると，沖縄県民の犠牲者は人口の４分の１に昇ったという[67]。

沖縄戦最大の悲劇は沖縄県民自身が誤った情報と皇民化（天皇の子であるという）教育のために実際に自分の家族を殺したことだと山城氏は言う。男はみな殺され女はレイプされると教えられて，父が家族のメンバーを殺し，母が小さな子を殺した。また日本兵によって配給された手榴弾，カミソリ，鎌，ナタなどで集団自決が行われた。捕虜になるのは恥だと教育されていたからである。戦場に進んで出た志願学徒2226人の少年少女のうち，半数が戦場で死ぬか自決している[68]。過った教育の恐ろしさには言葉を失う。

沖縄の人々はこのような経験があるので，日本の教育制度に懐疑的である割合が高い。今ではどのように死ぬかを教えた戦前の教育の間違いに多くの人が気づいている。「ぬちどたから」(命こそ宝）という言葉が沖縄の心を表す。何も教科書問題は韓国や中国のことではない。沖縄戦に関する歴史的事実を教えない日本の歴史教科書問題を沖縄県民たちは問題にする。さまざまな平和のために働く民間グループが教科書に対抗して，沖縄の平和を学習するスタディツアーによって草の根的な歴史教育の機会を提供している[69]。

８　女性の人権と軍事基地

クリスチャンである高里鈴代氏は那覇市の市議会メンバーで，沖縄の女たちの平和運動のリーダーとして活躍してきた。彼女は早くから「暴力」が「平和」の反対語だという女の視点を主張してきた。カウンセラーをしていたとき，彼女は多くの女たちがアメリカ軍基地に関連する買春産業に苦しめられていたのを見た。沖縄の悲願は基地のない生活である。面積が全日本の0.6パーセントに過ぎないのに，日本にあるアメリカ軍基地の４分の３が沖縄の土地の５分の１を占めている。沖縄にある44の巨大な基地は高いフェンスにめぐらされ，５万人の軍人やその関係者がおり，最新型の戦闘機や戦艦が揃っている。

高里氏は言う。「基地は単にミサイルや核兵器の倉庫ではなく，戦争によって勝利を収める目的で作られ暴力で支配され軍隊が決定権を持つ社会である。そのような社会では男たちは教え込まれた目的のために普通の生活から孤立させられている。軍隊主導社会の暴力的な性格は周辺地域を脅かし社会環境を悪くする[70]。」1950年代からいわゆる基地買春産業が貧しい沖縄女性を搾取することで，アメリカ軍兵士が地域の女性をレイプすることを防ぐことを暗黙の了解としてきたが，日本の売春防止法が1972年から適応されると，フィリピンからのもっと貧しい女性たちがこの産業を支えるようになって，買春産業の構造は変わらず続いている[71]。ここでは人間の歴史が最初から建設してきた巨大な壁を想像せずにはいられない。全世界の歴史の中で買春が行われなかった時代も地域もない。女を分断するこの巨大な組織構造の中では，階級の差によって利益を得る女と搾取される女とに分かれて，女自身も序列化される。こような構造では誰の利益が最も守られるのか。男優位の構造ではだれが得をするのか。高里氏は「軍隊のある国では男女の平等は実現しない[72]」し，「基地問題は平和と反核運動と共に，女や子供という社会の弱者の視点から見直されなければならない」と言う[73]。

第二次世界大戦から50周年の1995年４月１日，沖縄の北谷と宜野湾の間の７キロを歩く平和のデモ（200人参加）があった。北谷は50年前の同日にアメリカ軍が沖縄へ上陸した土地である。５月14日の沖縄返還23周年前夜には１万７千人が「人間の鎖」を作って宜野湾市の府天魔空軍基地を取り囲んだ。そんな折に起こったのが同年1995年の９月，三人のアメリカ人兵士が十二歳の沖縄少女をレイプした事件であった。それはおりしも北京女性会議の真っ最中で，そこでは女性への暴力が人権侵害だということが話し合われていたのだ。[74] 今までレイプされても隠すしかなかった時代はもう終わった。被害を届けた少女とその母の勇気がたたえられるべきである。彼女らは沖縄の女たちが粘り強く基地反対運動に関わってきた成果である。10月には少女強姦に怒った人口の８パーセントに当たる８万５千人の沖縄県民が，アメリカの基地廃止を求めてデモをした。統計では島民の80パーセントがこれを支持したと言う。[75] 大衆デモが民主主義の文化としてなかなか根付かない日本で，沖縄が将来の民主的な日本のビジョンを形成する先頭を切っているのではあるまいか。

９　結　論

今回わたしは歴史を学ぶことがこんなにも「エンパワメント」を経験することだったのかと感動している。わたしの小さな意識が拡大する喜びを感じる。新約のヨハネ福音書１章５節に「光はやみの中に輝いている。そして，やみはこれに勝たなかった」とある。無知という闇は決してこの明るい光である学ぶ楽しさ，探求する心に勝つことはないだろう。どんなに圧倒的な闇の中でも小さな光は目に見えるものである。わたしはこれを意識の光と見たい。現代の世界で女の意識が拡大している。特に女が自尊心（自分を大切に思う心）を取り戻していることが重要である。自分が悪いと思ってきた過去がそうではない将来へとうねり返されているのが，現代の女の共通した経験である。男に同化されることはわたしたちの望みではない。序列化されることもわたしたちのスタイルではない。男のように動けない，考えられないということはもうマイナスではないことを知った女の知恵が平和を作る子らを育て，排除や序列化を克服する非暴力の旗を掲げ共に手をたずさえて行進する。これからも歴史を学ぶ意識の光が，あの旧約聖書「出エジプト記」の奴隷解放のドラマに共鳴して，いくつもの海をまっぷたつに分けて行く、神の歴史の現実に参与する力となることを祈りたい。

[注]

(1) 菊地勇夫『アイヌ民族と日本人――東アジアのなかの蝦夷地』（朝日選書510　東京・朝日新聞社1998年第三刷）pp.11~14.

(2) 松浦基之『憲法の話』（東京・みずち書房 1983年）pp.64f.

(3) 外から歴史的に日本を見ると，日本にはいくつかの言語が存在している。アイヌ語，琉球語が代表的なものである。「大和」民族の攻撃によって消滅した言語もあったと考えられる。日本が決して単一民族の国などではないという視点に立った歴史理解が，大胆に展開される必要が今後大いにあるだろう。

(4) 李英和（り・よんふぁ）『在日韓国・朝鮮人と参政権』（東京・明石書店　1993年）p.28.

(5) 毎日新聞2002年４月25日11版。

(6) Changsoo Lee & George De Vos, ed., Koreans in Japan: Ethnic Conflict and Accommodation. (University of California Press, 1981), (8).

(7) 山下誠也・キムソンヒョ・日隈光男『在日コリアンのアイデンティティと日本社会――多民族共生への提言』（東京・明石書店　2001年）pp.147f.

(8) Carolyn Bowen Francis & John Masaaki Nakajima, Christians in Japan. (New York: Friendship Press,

1991), p.77. 以下この本からの引用は本論文著者が訳している。

(9) 山下誠也・キムソンヒョ・日隈光男 pp.149~153.

(10) Lee & De Vos, pp.33~34.

(11) Francis & Nakajima, p.77.

(12) 外登法おもしろ絵本編集委員会編『外登法おもしろ絵本』（東京・新幹社1994年）pp.34~39.

(13) Francis & Nakajima, p.77. 伊地知紀子　『在日朝鮮人の名前』（東京・明石書店　1994年）

(14) 外登法おもしろ絵本委員会　pp.6~9.

(15) 外登法おもしろ絵本委員会　pp.34~49. 李英和pp.21~23.

(16) 柳美里『水辺のゆりかご』（角川文庫　2001年8刷

(17) 山下誠也・キムソンヒョ・日隈光男　p.121

(18) 同掲書　p.157.

(19) 康熙奉（カン・ヒボン）『日本のコリア・ワールドが面白いほどわかる本』（東京・樂書館2001年）を見ると，全国のコリア・タウンが一覧できる。

(20) ほるもん文化編集委員会『在日朝鮮人・揺れる家族模様』（東京・新幹社1993年）p.53.

(21) 同掲書　p.49.

(22) 同掲書　p.48.

(23) 呉善花『スカートの風――日本永住をめざす韓国の女たち』（東京・三交社1992年21刷）と『続スカートの風――恨を楽しむ人びと』(同7刷)

(24) 福岡安則・辻山ゆき子『ほんとうの私を求めて――「在日」二世三世の女性たち』（東京・新幹社1991年。

(25) 同掲書　pp.33~48.

(26) 同掲書　pp.49~64.

(27) 同掲書　pp.65~77.

(28) これについては，わたしも娘をインターナショナル・スクールに通わせたので，各種学校扱いの事情を知っている。「あなたは法律違反をしています」というはがきを受け取ったり，地域の小学校の校長に会いに行かされたりした。娘が15歳（義務教育最終年）のとき宝塚市に引っ越したが，教育委員会の指導を受けさせられ，「罰金を払わなければならないこともあります」という覚書を受け取らされた。要するに各種学校であるインターナショナル・スクールに就学年齢の子供を通わせていることへの非難である。電車通学のための定期券の割引などもなかったし，インターナショナル・スクールに対する助成もないので，授業料は全面的に親の負担であった。日本人なら日本の学校へ行くべきだという「義務教育」の考え方は，同化政策が矛先を日本人にも向けていることの一例である。

日常的な娘の経験では，長い夏休み，まだ日本の学校が休みに入っていないときに外出すると，店の人がずる休みをしているととがめるので，娘は外に出るのがこわかったという。

現在ではインターナショナル・スクール在学生の定期券の割引や高校総体への参加などが改善されている。在日コリアンの闘いの勝利はこんなところにも現われ始めている。

(29) 同掲書　pp.109~121.

(30) Christian Conference of Asia-Women's Concerns, Women's Link (Hong Kong, CCA, June 1993), pp.16~18.

(31) 在日韓国人問題研究所編『ハヌル――在日韓国人中学生のための自己発見 BOOK』（東京・RAIK 1990年）

(32) 旧訳のエステル記　（新旧約聖書・新共同訳聖書協会）pp.763~774.

(33) 小坂洋右（写真・林直光）『アイヌを生きる文化を継ぐ――母キナフチと娘京子の物語』（東京・大村書店1994年）pp.46~49.

(34) 1997年「アイヌ文化の振興法」の公布・施行により，「北海道旧土人保護法」と「旭川市旧土人保護地処分法」が廃止された。新法はしかし，その名が称する通り，文化の振興を主眼とするものであり，アイヌ民族が求め続けてきた「先住権」には触れていない。(佐々木馨『アイヌと「日本」――民族と宗教の北方史』東京・山川出版社2001年，p.4)

(35) 小坂洋右　pp.103~114.

(36) 同掲書　pp.50~64.

(37) 同掲書　pp.67~68,78~102,140~145.

(38) またはキナフチ。フチは年配女性に尊敬と親しみを込める呼称。小坂洋右　p.11.

(39) 同掲書　pp.78~87,90~102,136~139.

(40) 同掲書　pp.90~91,96~98.

(41) 同掲書　pp.188,212.

(42) 同掲書　p.238.

(43) 19世紀後半の日本開国時の事情について，西欧列強が無理にこじ開けたという印象が日本人には強いが，北太平洋の鯨捕獲に関してアメリカの難破捕鯨船の船員が外交関係のない日本に拘束されたという，人道的な国際問題に端を発したことを日本人はよく知らない。通商条約までの過程は次の資料参照。外務省外交史料館・日本外交史時点編纂委員会『(新版) 日本外交史辞典』pp.149~153.

(44) 菊地勇夫　p.244.

(45) Francis & Nakajima, p.66.

(46) 菊地勇夫　pp.266~269.

(47) 佐藤文明『戸籍うらがえ史考――戸籍・外登制度の歴史と天皇制支配の差別構造』(東京・明石書店1988年2刷　p.169.

(48) 同掲書　pp.12f.

(49) 同掲書　p.167.

(50) 高橋菊江・折井美耶子・二宮周平『夫婦別姓への招待』pp.138f.

(51) 宮田節子ほか『創氏改名』(東京・明石書店1994年) pp.156f.

(52) チカップ美恵子『風の恵――アイヌ民族の文化と人権』(東京・御茶の水書房1991年)

(53) チカップ美恵子『アイヌ・モシリの風』(東京・ＮＨＫ出版2001年)

(54) コリント信徒への第一の手紙12章。新共同訳新旧約聖書 (聖書協会) pp.315f.

(55) 創世記１～３章。新共同訳新旧訳聖書 (聖書協会) pp.1~5.

(56) 外務省外交史料館・日本外交史時点編纂委員会『(新版) 日本外交史辞典』p.1050.

(57) 池宮城秀意『戦争と沖縄』岩波ジュニア新書19 (東京・岩波書店1985年) pp.96~103.

(58) 大城将保『(改訂版) 沖縄戦――民衆の眼でとらえる戦争』(東京・高文研1994年4刷 pp.236~237.

(59) 同掲書　p.4.

(60) 同掲書　pp.136~137.

(61) 同掲書　pp.79.

(62) 同掲書　p.40.

(63) 同掲書　p.161,195.

(64) 同掲書　p.77,79. 日本兵たちの心理状態の説名にわたしの解釈を付け加えた。

(65) Japan-North America Commission on Cooperative Mission.

(66) 同掲書　pp,92,97.

(67) 同掲書　111,79~80

(68) 同掲書　pp.152~156.

(69) 同掲書　pp.9~11.

(70) Francis & Nakajima, p.84.

(71) 「女性の人権委員会」編　『女性の人権アジア法廷――人身売買・慰安婦問題・基地買春を裁く』

(72) 渡辺和子『女性・暴力・人権』(東京・学陽書房1994年) pp.190.

(73) Francis & Nakajima, p.84.

(74) 高里鈴代『沖縄の女たち――女性の人権と基地・軍隊』(東京・明石書店1996年) p.17.

(75) Desmond, Time Asia, November 6, 1995, p.16.

[Abstract]

Women Living in the Multi-cultural Traditions of Japan

Social and Cultural Analysis of Minority Women Living in Japan

Mayumi MORI

This paper spotlights the Korean living in Japan, Ainu and Okinawan peoples, and gives brief descriptions of their history and present situations, especially focusing on the women of these multi-cultural traditions of Japan. Japan does have multi-cultural traditions, evidenced by their struggles and failures to be assimilated into mainline Japanese society. The ruling group caused these minorities to suffer so much for a long time under an oppressive policy of assimilation. Have Japanese really admitted that narrowness and exclusiveness have not been working ?